

さぬきこくふあとたんさくじぎょう
讃岐国府跡探索事業

ミステリーハンターのまち歩きガイド



埋蔵文化財センターから讃岐国府跡を望む

2014年3月

香川県埋蔵文化財センター

目 次

ミステリーハンターと歩く！ ……………	1
真鍋 昌宏	
讃岐国府ミステリーハンターとまち歩き ……………	2
森下 友子	
まち歩きガイドメモ(基本的内容) ……………	3
まち歩き活動冊子作成委員会	
古代のみち歩き「讃岐国分寺から南海道を歩き、山内瓦窯跡へ」 ……	4
高橋 利秋	
奈良・平安時代の窯跡「さあ、山内瓦窯跡へ行こう」 ……………	7
古田 博子	
創建時の伽藍配置に思いを寄せて「讃岐国分寺に参る」 ……………	9
宮本 義彦	
綾氏、綾川、阿野郡を歩く「讃岐国府まち歩き」 ……………	11
宮本 義彦	
地元に住み、暮らすなかで感じたことを伝えたい 「菅原道真が見た讃岐国府の風景を歩く」 ……………	14
梶 英憲	
軍王が見た山「謎の古代山城・城山を歩く」 ……………	18
梶 英憲	
時間を超えて歴史を旅する 「国府(昔の県庁)の里 阿野郡・府中村を歩く」 ……………	22
池浦 健一	
讃岐国での崇徳上皇の実像に迫ろう 「崇徳上皇の足跡を歩く」 ……………	30
安藤 みどり	
編集後記 ……………	36



讚岐国府跡推定地付近の地図
国土地理院地形図 (1/25000) を使用しました

城山
タニの頭

八十場湧水

古代の推定海岸線

港国府推定地

港(松山)推定地

新宮古墳

推定南海道

讚岐国分寺跡

讚岐国分尼寺跡

タニハナ山古墳

弘法寺古墳

醍醐寺

加茂古墳群

穴薬師(綾織家)古墳

白峰寺

開法寺

鴨養寺

日向王の墓

鼓岡神社

鴨ヶ峰古墳

讚岐国分寺跡

讚岐国分尼寺跡

開法寺

鴨養寺

ミステリーハンターと歩く！

香川県埋蔵文化財センター所長 真鍋昌宏

平成21年度から始まった讃岐国府跡探索事業では、讃岐国府の場所や実態を明らかにすることを目的に、ボランティア（ミステリーハンター）の皆さんを中心に、地名の聞き取り調査、微地形の記録、水利慣行の調査や発掘調査などを実施し、多くの成果をあげることができましたが、このほかに平成23年度からは「まち歩き」も実施しています。

まち歩きは、県内各所でいろいろなテーマを設定して実施されていますが、ここでは、「古代の県庁「国府」はどこ？」、「天神さん夢の景色一道真の詩と歩く国府の里」、「南海道を歩き、讃岐国分寺に参る」など、ここならではのテーマで実施してきました。

コースの内容については本文を読んでいただきたいと思いますが、それぞれのコース設定にあたっては、ミステリーハンターの皆さんの事前の勉強はもちろんのこと、参加者が満足する内容となるよう工夫がこらされています。

本書は、これを片手に同じコースを歩く事ができるようになっていますので、一度チャレンジされてはいかがでしょうか。

また、この地は讃岐国府跡のほか、国府が整備される以前の古代の山城として屋島城と並んで著名な城山や、崇徳上皇配流地として関連する伝承地なども点在しており、古代のロマンあふれる場所といえます。埋蔵文化財センターの見学と合わせてご利用いただければ幸いです。

2014年3月

讃岐国府ミステリーハンターとまち歩き

この本は讃岐国府跡探索事業ボランティア調査員（讃岐国府ミステリーハンター）が行ったまち歩きの活動記録集です。香川県埋蔵文化財センターは2009年度から讃岐国府跡探索事業を行っています。讃岐国府跡探索事業の目的は讃岐国府跡の場所やその構造を明らかにすることです。この事業では埋蔵文化財センターの職員だけではなく、ボランティア調査員として募った一般の方々とともに発掘調査をはじめ、いろいろな調査を行いました。どのような調査を行ったかは2013年3月に刊行した『讃岐国府ミステリーハンターの参加活動 讃岐国府跡探索事業ボランティア調査員（2009年度～2012年度）』（編集 讃岐国府跡探索事業ボランティア活動編集委員）で紹介しています。

これらの調査を通じて、ミステリーハンターたちは普段何気なく見ている風景の中に隠された歴史や魅力を数多く発見しました。「我々が見つけた地域の歴史や魅力をみんなに伝えよう。」このような思いで、県内外各地から参加者を募り、国府跡推定地の坂出市府中町やその周辺のエリアを案内するまち歩きを行いました。本書ではどこを案内したのか、見どころをどのように語ったのかを記しています。文章にすると、丁寧で少し難しいことばになっていますが、実際は身振り手振りを加えて、讃岐弁で熱く地域の魅力を語っていました。参加者もガイドの語りに熱心に耳を傾け、ゆっくりと歩きながら、いろいろなものをじかに見ました。さあ、ガイドたちはどんな語り部となったのでしょうか。

（香川県埋蔵文化財センター文化財専門員 森下 友子）

ミステリーハンターまち歩き一覧

年度	月日	タイトル	場所	ガイド
2011年度	5月22日	古代の県庁「国府」はどこ？3 遺跡の専門家と歩く1,300年	坂出市府中町	梶
	6月5日	古代の県庁「国府」はどこ？3 遺跡の専門家と歩く1,300年	坂出市府中町	梶
	10月9日	天神さん夢の景色—道真の詩と歩く国府の里—	坂出市府中町	梶
	11月19日	国司さまご一行、ご案内します—あなたも新任国司に—	坂出市府中町	宮本
	11月20日	天神さん夢の景色—道真の詩と歩く国府の里—	坂出市府中町	梶
	12月10日	国司さまご一行、ご案内します—あなたも新任国司に—	坂出市府中町	宮本
2012年度	4月7日	登ろうよ、歴史の里山 道真と味わう城山の絶景	坂出市府中町・西庄町	梶
	11月11日	古道を歩く—いにしへの道から讃岐国府へ行こう—	高松市国分寺町・坂出市府中町	高橋・古田
	11月4日	古代山城を探検しよう	坂出市府中町・西庄町	梶
2013年度	7月21日	讃岐国府を歩く 国司様ご一行、ご案内いたします！	坂出市府中町	宮本
	9月8日	道真が漢詩に詠んだ国府を歩く	坂出市府中町	梶
	9月22日	讃岐国府跡と新宮古墳を歩く	坂出市府中町	池浦
	10月13日	南海道を歩き、讃岐国分寺に参る	高松市国分寺町・坂出市府中町	宮本・高橋・古田
	10月27日	崇徳上皇の足跡を歩く	坂出市府中町・西庄町	安藤
	11月17日	南海道を歩き、讃岐国分寺に参る	高松市国分寺町・坂出市府中町	宮本・高橋・古田

まち歩きガイドメモ（基本的内容）

<準備>

主催者との打ち合わせをスタートする（交通手段やサポート体制など）
コース選定し、コース名を考える（キャッチコピーも併せて付ける）
実施日程を早く決定し、広くあらゆる媒体を利用してPRする
定員を決め、参加者の確保を図る
雨天時の代替えを検討しておく
現地を歩く（視野に入るものはすべて事前に調査しておく）
説明箇所（ポイント）を決め、コースを図化する
ポイント以外の道ゆきでの雑談も含め、話の箇所を選ぶ
説明する箇所や話をする箇所に進行順に番号を付ける
番号ごとにメモを記入する（配布資料に反映する）
持ち歩ける配布資料を作る（地図、昔がイメージできる想像図など）

<実施>

☆スタート地点でのあいさつ、資料渡し、全体説明、安全啓発、アウトライン説明を行う

☆時代や年号は確定の場合ハッキリと（歴史をメモ化）

☆構造物のサイズは分かっている時はコンマまでハッキリと（スケールを携帯）

☆東西南北の方位を明示する（コンパスを携帯）

☆それぞれの地点で、視野に入るものはすべて事前に調査、メモを作る（現地）

☆本に記載されている場合はその出典を（関連図書に目を通す）

☆石造物や建物などは時代を調べる

☆なぜこの場所なのか（地形やモノの流れなど自分で分析して説明する）

☆誰が関与しているのか（人と人の流れを事前に学習する）

☆当時の時代、同時進行していた歴史は何か（日本史・世界史）

☆現在までにどう変遷したか（時代の流れ）

☆当時のイメージを思い描き、自分なりの疑問点を出す

☆参加者からの質問を想定して事前に組み立てる

☆話のパターン化「○○とされています、○○という説もあります、これは○○さんの話です、これは私の妄想です、○○かも」など付け加える。

☆冗談やオチのある話を適当に仕入れておく

☆ルート近辺の食べ物どころを紹介する

☆地元の人のお話を必ず入れる

（まち歩き活動冊子作成委員会）

南海道を歩き、讃岐国分寺に参る

いにしえ 古代のみち歩き

「讃岐国分寺から南海道を歩き、山内瓦窯跡へ」

高橋 利秋

コース概要

現在は四国霊場八十八カ所の第80番札所讃岐国分寺。この中門前から約2^{キロ}西方向にある讃岐国府跡（坂出市府中町）へ向かって、遍路道や丸亀街道・伊予街道、推定南海道を通り、山内瓦窯跡まで約1.5^{キロ}の古の道を訪ね歩き、6カ所でコースの見どころを案内します。

コース前半は高松市国分寺町内の丸亀街道と伊予街道を歩きます。この2つの街道は高松城からの道で国分寺町内で同じ道になります。瀬戸内海歴史民俗資料館が1990年（平成2年）に発行した『丸亀「街道」調査報告書』を参考に四国遍路道案内道標を見学しながら、両街道の分岐点（高松市国分寺町と坂出市府中町との境界）までが前半コースです。

コースの後半は私たち讃岐国府跡探索事業ボランティアと県埋蔵文化財センターが地籍調査で探し出した「大道」の場所を追いかけて、高松市国分寺町に隣接する坂出市府中町を案内します。地籍調査は、坂出市府中出張所が保管する明治前期の壬申地券地引絵図と、江戸時代の検地帳「阿野郡府中村田畑順道帳」の調査で江戸時代の検地帳をみるとこの付近の田畑には「大道」の通称名があり、明治時代の壬申地券地引絵図に照らし合わせると、これらの田畑がどこにあるのかが浮かび上がりました。この「大道」名のある田畑は江戸時代の伊予街道や近世中筋往還（両街道は坂出市府中町以西では同じ道）の推定場所とほぼ一致しました。香川県を東西に貫く近世中筋往還は古代の南海道を踏襲していると思われるので、この「大道」名のある場所＝南海道と考え、「大道」の調査結果をまち歩きに使用し、今回のコースにしました。

① 出発地点の国分寺中門（仁王門）前

中門前で西側に並ぶ道標4基を北側より順次説明します。ひとつは遍路道道標で「右一の宮寺」への案内をしています。この道標が一番朽ちていますが、時代は表示されていません。「右の文字」と「左の文字」が重ねて表示されているため、移転や転用されたものがあるのではないのでしょうか。

次の道標は1886年（明治19年）に四国遍路の^{だいせんだつ}大先達である^{なかつかさもへい}中務茂兵衛が建立した一の宮寺と高松への道標です。中務大先達は山口県出身で江戸幕末から57年間かけて279回の四国霊場歩き遍路を行った方です。中務茂兵衛の道標は四国全体で238基余りが確認されているようです。

次の道標は、白峯寺と一の宮寺の案内道標で江戸時代後期の建立です。そして最後の道標は白峯寺への案内で江戸時代中期の建立です。これら4基の道標には、「一の宮道／是ヨリ七十五丁」や「是ヨリ／白峯五十丁」「右へんろ道是より白峯／道法五十丁」など、方向や距離表示が刻まれており、より分かりやすい銘文になっています。また、各道標は刻まれている内容から考えると、何らかの理由によりもともとあった場所からここに集められているようです。ここから江戸時代の街道を西の方向へ歩いて坂出市との市境まで行きます。さあ、歩き開始です。

② 新宮と綾坂方面への分岐点

今歩いているこの道は、昔は高松行きのバスが通行していました。今でも普通乗用車の対向が難しい程の道幅です。この先350[㍎]程歩くと、県道33号線に接する三叉路へ出ます。丸亀街道と県道の間角に江戸時代後期建立の金毘羅石燈籠と「まるかめこんひら道」と書かれた道標があります。この三叉路で丸亀と伊予街道が分岐します。また、ここには日向王の塚があります。日向王は、讃岐の国造であった讃留霊王の7代目の子孫です。

この三叉路からは、まっすぐ西に向かい坂出市府中町綾坂方面に行くコース（丸亀街道と考えられているコース）と、県道33号線を横断し、関ノ池西堤を通過して坂出市府中町新宮方面へ行く2つのコース（伊予街道と考えられているコース）があります。

今回は、南海道の可能性の高い新宮方面に行くコースを案内します。三叉路から県道を渡って、JR 予讃線の踏切へと向かう農道を歩きます。古の道の雰囲気がかもしだされてきます。軽トラ通行に難しいほどの狭い道です。この農道西側の田んぼの地名が「池大道北大道西添」。その田んぼの南側が「池大道南添」の地名が残っています。このことから、この農道は「大道」と呼ばれていた街道であることがわかります。農道の東側は、国分寺町内のため調査をしていませんので、残念ですが、わかりません。いつの日か国分寺町の地籍図があれば解明したいものです。

③ 関ノ池

JR予讃線の小さな複線踏切を渡ると、関ノ池の西側土手付近に出てきます。この付近は、東側には関ノ池が広がり、のどかですが、南側には現在の国道11号高架橋が見え、たくさんの車が行き交っています。また、東を望めば六ツ目山（標高317[㍎]）が見え、古の道を歩きながら見上げると現代の道という景色があります。

国道の高架下を抜けると、その向こう側には奈良・平安時代にあった「南海道」です。古に思いを馳せて、さあ、みち歩きを続けましょう。

④ 府中町前谷地区

分岐点から約600m南に向かい国道11号高架橋下をくぐると、その先に家をはさんでY字に道が分かれています。このあたりから西方向を見ると、城山の明神原(標高413m・通称たこのあたま)がよく見えます。明治時代の測量地図によると右側の道が古く、左側の道はその後の道のようにです。どちらの道を行ってもすぐ先で伊予街道と呼ばれていた街道と合流します。この付近には、調査によると「国延大道北大道南添」や「大道南添文化八末新興」、「向原大道添」などの地名が残っています。古いであろう右側の道をゆるやかに下ると、三叉路へ出ます。ここから東へ少し坂を上ると、先ほどの左側の道と合流し、山内瓦窯跡に向かう交差点に出てきます。

⑤ だいどう 大道 おおみち

この交差点から南へ100m程行くと山内瓦窯跡に着きます。また、東に行くと、関ノ池の東側を通る国分寺から一の宮寺に行く遍路道と合流します。この交差点から西に向かいJR予讃線の高架下をくぐって行くと、右側に「深谷東大道北添新開」、左側には「市ノ井出東大道下新開」、さらに西へ行き、綾川を渡った先には「流田東大道下」や「大道上」、「大道上西大道上」などの地名があり、かつての街道の痕跡があります。

ところで、瀬戸内海歴史民俗資料館の調査によると、香川県の中央を東西に横切る近世中筋往還という街道があったそうです。この往還は香川県と徳島県の県境の大坂峠から、愛媛県の鳥越(川之江市)に向かっており、1633年(寛永10年)の「讃岐国絵図」(金刀比羅宮所蔵)でも大道として描かれています。近世中筋往還は大坂峠から高松市南部を通り、坂出市府中町に入り、さきほどの三叉路にでます。この三叉路から香川県の西端まで、この往還と伊予街道は同じ道を通ります。

私はこの往還は南海道を踏襲した道ではないかと思っています。国分寺町の東にある高松市中間町の川原遺跡はこの往還のすぐ近くにある遺跡ですが、発掘調査により古代の道が見つかりました。この遺跡から西では、南海道と推定している往還は六ツ目山の北側の峠を通り、国分寺町を東西に横断し、関ノ池の南側の高松市と坂出市の境まで来ます。ここが先ほどの三叉路です。この辺りは空路という地名です。ここから南海道は2つのルートが考えられます。北西方向の綾坂(坂出市府中町綾坂)を通り、綾川を渡って推定讃岐国府付近を通り、城山の南麓を経由して額坂から飯山町(丸亀市飯山町)に行くルート、もう一つのルートは、近世中筋往還と同じ道で、市境から西に向かって前谷、赤尾(いずれも坂出市府中町)を通り、新宮古墳の北側を抜けて石井(坂出市府中町)に入り、推定讃岐国府付近の南側の

綾川を渡り、額坂（坂出市府中町）に向かって飯山町に入る谷合を行くルートです。また、国分寺町史をひもとくと、国分寺を南海道が通った証左も定説も無いとしながらも、国分寺の中央エリアには野間川があり、水があふれて通行困難なので、南海道は高松市御厩町から国分寺の前を通ったとしています。どのルートが推定南海道であるかは今後の調査を待ちたいと思います。

（ガイド役は高橋でした）

参考文献

丸亀「街道」調査報告書 香川県歴史の道調査報告書第1集

（瀬戸内海歴史民俗資料館発行 1990年3月30日）

讃岐国往還調査報告書 香川県歴史の道調査報告書

（瀬戸内海歴史民俗資料館発行 1993年3月31日）

地形・地名調査報告 讃岐国府跡探索事業 平成21・22年度

（香川県埋蔵文化財センター発行 2011年11月）

★参加されたお客様の中に南海道にたいへん興味を持っており、自分で調査されているとおっしゃっていた方がいたので、私も仲間ができたようでうれしいですと返事をしました。ガイドを通して、このように興味ある方たちがおられることが分かってきたので、地域の歴史を伝承していくことへの思いは、ますます強く感じています。古の道を歩き、奈良・平安時代を想いつつ、皆様に感謝しています。（高橋：談）

奈良・平安時代の窯跡

やまのうちがようあと

「さあ、山内瓦窯跡へ行こう」

古田 博子

⑥ 府中・山内瓦窯跡

やまのうちがようあと

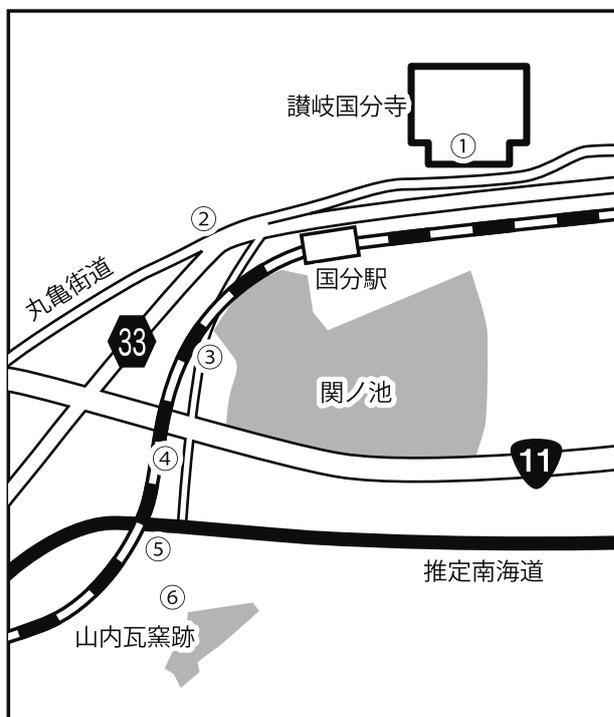
古墳時代の石棺を産出した鷲の山（標高322㍎）の北嶺（250㍎）北側ふもとに位置する野上池の堤周辺に窯跡が分布しています。古代の讃岐国分寺と讃岐国分尼寺の瓦を焼くための奈良・平安時代の窯跡です。1922年（大正11年）に国史跡指定を受けており、現在、見学できるのは1号窯跡の1基のみ。全体で13基の窯があったと推定されています。

この窯は、斜面を掘りぬいたり、掘り窪めた「あながま」と呼ばれる窯で、瓦を並べて焼くための階段が3段残っています。当時の様子を考えると、あと何段かはあったのではないかと推定されます。

国分寺や国分尼寺の周辺には、このような窯を作ることでできる場所は多くあるのに、なぜここに作られたのか興味深く思います。近くに南海道と呼ばれた官道が通っていたり、瓦を焼くため山から切り出す薪など資材の運搬に都合がよかったこと、また、監督は国司が実施していたと考えられるので、讃岐国府と国分寺の中間地点にあるこの場所に窯が作られたのではないかと思います。

府中村と山内村との境界にあった府中・山内瓦窯跡は現在、のどかな山あいにあつて、今でも奈良・平安時代に国府で働く人たちや南海道を行き来する人たち、そして窯で瓦を焼く煙が立ち昇り、活気あふれる所であったのが思い描かれる場所です。
(ガイド役は古田でした)

★ボランティア活動のなかでまち歩きの話があり、その時は他人事のように「イインじゃない」と言ったものの、実際、ガイド役が回ってきた時は困った。本当に逃げ出したかった。ひと前で話すことなんか一番の苦手なのに。なんとか勉強してガイドを始めたのが2012年11月、九州にいる息子に子供、私には初孫が生まれた頃のこと。2年目の2013年10月～11月も何とかどうにか終わったという感じ。「うちの顔は引きつっているのに、ほかのガイドさんは幸せそうな楽しい顔で話しているわ。たくさんの資料や文献で勉強したことが伝わってくるわ」。今年のまち歩きも終わって、わたし自身はホッとしているが、ほかのガイドさん達にはもっともっと活躍して欲しいと思います。(古田：談)



※図中の番号は文章に対応しています



▲ 推定南海道まち歩き



▲ 山内瓦窯跡

創建時の伽藍配置に思いを寄せて 「讃岐国分寺に参る」

宮本 義彦

コース概要

今日は皆さんに創建時代の讃岐国分寺と現在の四国八十八カ所第80番札所を見ながら説明したいと思います。

まず、創建当時の伽藍の地図をみて下さい。皆さんが立っている所は今、仁王門ですが、当時の中門です。そして、中門の南にある南大門は今、県道33号線が走っている辺りと思われま

す。寺域は東西220㍍、南北240㍍もあり、寺全体を囲む築地塀（一部復元あり）、そしてその外側は溝も掘られていました。寺の内と外を厳格に分けていて、寺の中で何が行われていたか分からなかったほど、壮大なエリアだったと思います。

① 塔跡

続日本紀によると、741年（天平13年）に聖武天皇が国分寺創建の詔をだします。「金泥で金光明経を手本に習って打ちし、七重塔ごとにそれぞれ一部を置かせる。……そもそも七重塔を建造する寺は、国の華ともいうべきで、必ず良い場所を選んで……」建てられます。そして、讃岐国分寺は756年（天平勝宝8年）には完成していたと続日本紀に記載されています。余談ですが、各国に建てられた国分寺、国分尼寺の頂点は東大寺・法華寺であります。

さて、塔は基壇（17.8㍍四方）、建物（10.1㍍四方）、高さが推定で63㍍、心礎（2.8㍍ × 1.8㍍）、中央には40㍍のほぞ穴です。江戸時代初期の絵図に礎石だけの状態が描かれています。今は心礎の上に中世の石製の塔が建っていますが、創建当初は心礎の上に心柱、そして七重の塔が建っていたわけです。

② 金堂跡

現在の本堂の前に大きな石が並んでいますが、これが創建当時の金堂の礎石です。金堂は現在でいうと本堂です。この礎石をみると、基壇（34.9㍍ × 21.3㍍）、建物（27.8㍍ × 14.2㍍）と推定されます。この大きな石をみて、聖武天皇の国づくりの意気込みを感じとっていただきたいと思います。

今の本堂は、金堂の後ろにあった講堂の礎石を再利用して建てられています。基

檀の規模はわかりませんが、建物は22.8㍍ × 12.7㍍と推定されます。中門、金堂は回廊で結ばれていました。

③ 銅鐘

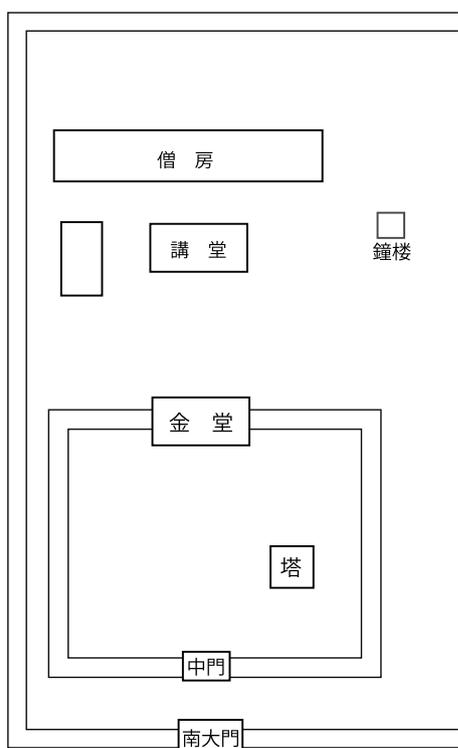
金堂跡の右手にある銅鐘は、全国の国分寺の中で最も古い鐘です。国分寺創建ころからこの辺り一円に時を告げていた鐘です。もしかしたら発掘で明らかになった鐘楼に吊るされていた鐘かもしれません。今までよくぞ残っていたものです。江戸時代にはこの鐘がよく鳴るといので、1609年（慶長14年）生駒藩主生駒一正が一時、持って帰ったという話も残っています。

④ 奈良時代の伽藍

伽藍跡は公園として残されています。この石造模型は10分の1で再現されており、築地塀の一部は実物大で復元されています。七重の塔は、都から南海道を通ってきた時、これが讃岐の国分寺かと人々を迎えたことでしょう。

伽藍の配置を詳しくみると、東西220㍍の4分の1のところの一直線で南大門・中門・金堂・講堂・僧坊が並んでいるのがわかります。主な位置は定まっていたようですが、東西220㍍の半分、すなわち伽藍の右の方110㍍は何もありません。どうしてなのか？ わかっておりません。

⑤ 僧坊跡



讃岐国分寺伽藍配置図

全国でもトップクラスの規模の僧坊跡は、遺構を建物で覆い、当時の僧坊を復元しています。ここで国家試験に合格したエリートの僧侶たちが勉強・生活した場所です。当時の仏教は、民衆のものでなく、国家のためのものでした。聞いた話ですが、試験に「地震はなぜ起こるのか、またその対策を述べよ」と出たそうです。皆さんはどう答えますか。

また、僧坊跡の前には南北（約17.5㍍）、東西（約10㍍）の礎石を使わない掘立柱建物跡が発見されており、僧坊を補完する建物と考えられます。

以上で私の話は終わりますが、その後、衰亡していた寺を空海が中興したといわれ、後々の四国霊場第80番札所となっています。

（ガイド役は宮本でした）

讃岐国府を歩く 国司様ご一行、ご案内いたします!

綾氏、綾川、阿野郡を歩く

「讃岐国府まち歩き」

宮本 義彦

コース概要

まず、7～9世紀ころの讃岐国の生い立ちから説明致します。

そのころの日本国は、66カ国2島から成っていました。そして701年（大宝元年）に大宝律令が完成、翌年に施行されます。律は刑法、令は行政法・民法です。

各国には中央から国司らが派遣され、郡司、里長は地方の豪族が任命されました。国は大国、上国、中国、小国に分かれていました。讃岐国は上国で、役人は数百人いたと思われます。

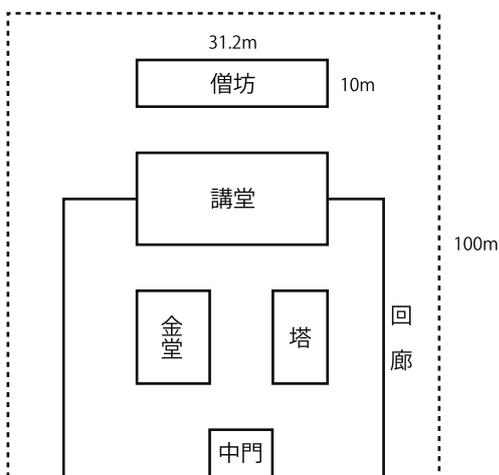
私のキー・ワードは、綾氏、綾川、阿野郡^{あや}で、綾氏は、天皇家の祖先系譜を持つ賜姓一族です。綾川は、物流拠点の一部です。阿野郡は、倭名類聚抄^{わみょうるいじゅしょう}によると11の郡の真ん中に当たります。また、倭名類聚抄に「国府阿野郡に在り」と記載されています。

① 開法寺の伽藍と成立

発掘調査から開法寺は白鳳時代ころにつくられた讃岐最古の寺院の一つ（一番古いのは豊中町の妙音寺）で、讃岐国府とほぼ同じ時期に創建されたと思われます。

70[㍴]×100[㍴]の伽藍の中に塔・金堂・講堂・僧坊・回廊があると考えられています。塔跡には17個の礎石があり、その真ん中に心礎（2.1[㍴]×1.2[㍴]）・柱座・ほぞ穴（直径87[㍴]・深さ8[㍴]）があることから塔は、五重塔と推定されます。

（左図は開法寺配置推定図）



開法寺伽藍配置推定図

*菅家文草「開法寺の中、暁にして鐘に驚く」
「開法寺は、府衙^{ふが}の西に在り」

その後、開法寺は、国府の付属寺院として組み込まれていきます。

② 段丘崖

崖の下は、綾川が氾濫すると水没する場所で、国府の一部（南門？）が削られた可能性があります。地名調査によると、ミナミガラ ヒガンガラ クボと呼ばれ、現在も地名が残っています。

③ 讃岐国庁跡碑

讃岐国府が府中にあったことを示す研究は、江戸時代ころから進められ19世紀初め「讃岐志」（梶原藍渠）、「全讃史」（中山城山）に述べられています。

明治・大正時代には、地名を中心に研究が行われました。1925年（大正14年）に地元の有志と鎌田共済会の岡田唯吉氏が中心になって讃岐国庁があったことを示す石碑を建てました。石碑の文書は漢学者牧野健次郎氏です。

④ 発掘現場

今までに30次（回）で、現在、31次の調査を行っています（2014年2月現在）。注目すべきは、第6次1979年度（昭和54年）総柱建物、塀、溝、そして第7次1980年度（昭和55年）築地状の遺構、瓦。第28次2010年度（平成22年）大きい溝、小さい溝、3つの石、第29次2011年度（平成23年）7世紀ころの大型掘立柱建物（床面積60㎡）があります。第30次2012年度（平成24年）では瓦ぶきの塀、建物の柱穴など国府確定につながる遺構・出土品が発見されています。

⑤ 印やく碑

1916年（大正5年）、四国新聞の前身である「香川新報」に赤松景福氏が「府中央蹟」を掲載しました。1919年（大正8年）に史蹟名勝天然記念物保存法ができ、国府跡の顕彰活動が活発になりました。印やく碑に赤松氏の名前があります。

⑥ 新宮古墳

新宮古墳は、6世紀終わりごろに造られ、一辺が約20㍍の方墳で、全長約12㍍の大型横穴式石室を持つ古墳です。

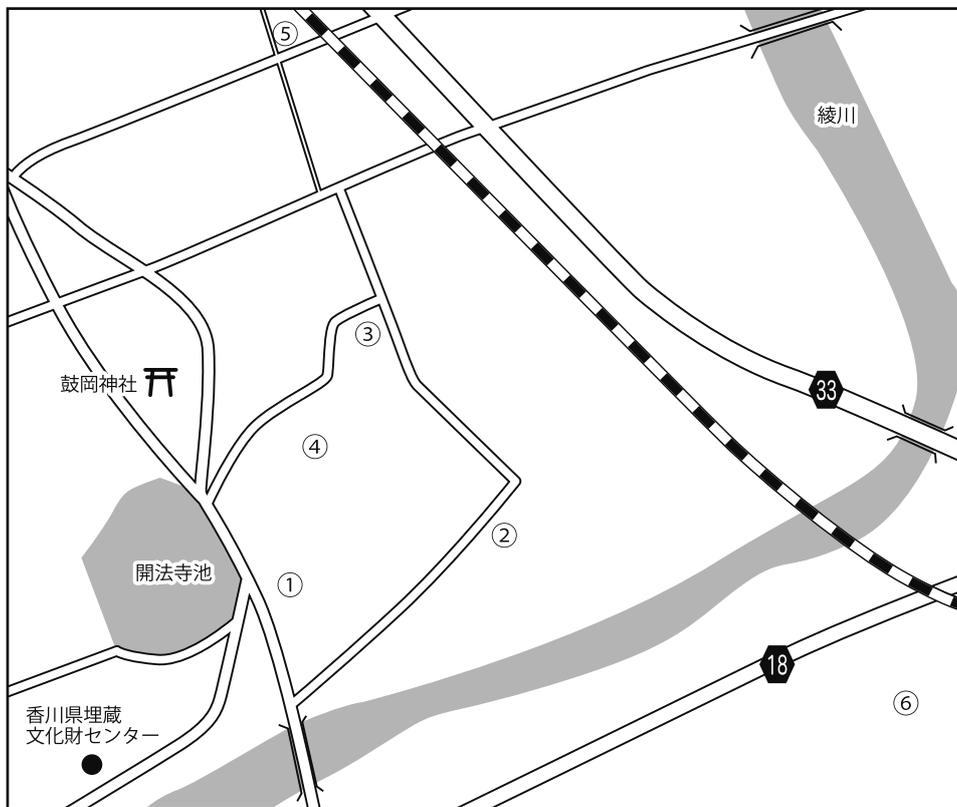
この綾北平野には、他に加茂古墳群、醍醐古墳群があり有力豪族が結集させられる事象があったと思われます。

⑦ その他

讃岐国の国司を務めた菅原道真の書いた祭文によると讃岐国の人口は、約20万人 課丁1万8千人（青年男子） 官田1万8千町でした。青年男子は、租税・労役・兵役が義務付けられておりました。

（ガイド役は宮本でした）

★参加された皆さんが退屈しないように工夫をした。例えば、「開法寺では、何重の塔だったでしょうか？ 三重の塔それとも五重の塔？」また、南海道の話では「駅家には、馬を何疋おかれていたのでしょうか？」とクイズを出し、いろいろ話が弾みました。ある時にはまち歩きの途中で雨が降り出し、発掘現場の案内が出来なかったため、古代の瓦の拓本を取ることで、全員で初めての拓本にチャレンジし、大変喜ばれたことも思い出深い。また、府中湖「水のフェスティバル」では、子供・大人たち50人程、府中湖から讃岐国府跡まで歩きながらマイク片手に話した時は、楽しかったという記憶があります。私事ですが、これらの活動を通して古代の寺院・土器に興味がわきました。仏教も勉強してみようと思い、通信課程（3年）を卒業し、今はどっぷりその世界に浸かっています。（宮本：談）



※図中の番号は文章に対応しています



▲ 開法寺塔跡



▲ 新宮古墳

地元に住み、暮らすなかで感じたことを伝えたい

「菅原道真が見た讃岐国府の風景を歩く」

梶 英憲

コース概要

① 埋蔵文化財センター玄関

私の住んでいる坂出市府中町は、讃岐のまん中に位置し、昔から国府があったといわれています。香川県埋蔵文化財センターでは2013年（平成25年）2月に、発掘調査の結果「2009年度からスタートした讃岐国府跡探索事業4カ年の最終年度に到り、国府の中心施設の一部を見つけることができました」と発表、2月には県内外から1000人を超える見学の人たちが訪れました。この府中で育ち、暮らすなか、「国府はやっぱりあった」と感慨に耽ることができました。

府中に住む私は、特に讃岐国府の国司として赴任した菅原道真が残した「菅家文章」を読みながら、地元で暮らす人の目線が大事だと思いました。菅原道真のおじいさん清公きよともは、804年（延暦23年）に遣唐使の一員として、空海や最澄らと共に唐に渡っています。お父さんの是善これよしは、讃岐権介にも任ぜられました。その37年後、国司として讃岐に来られた「みちざねさん」は、山や川、人の心を詠んだ詩を多く残してくれました。府中に住む私は漢詩を詠んだ場所・情景について考えたことを皆様にご紹介したいと思いました。

道真の詩に「開法寺は府衙ふがの西に在り」という注記があります。初めて讃岐に来た旅人に開法寺の場所を示す言葉だと思います。府衙は開法寺の東側にあることになります。旅人は高松方面から府中町に入り、新宮の所から左にカーブして西、額坂（坂出市府中町額坂）に向かいます。旅人は、前谷（坂出市府中町前谷）の谷筋を出てきますから、最初に開法寺の塔が見え、その横に国衙の門が見えて詩と風景が一致します。

菅原道真は886年（仁和2年）に讃岐に着任しました。そして4月から府内各地に出かけます。では私たちも道真が詠んだ場所に立って風景を見て行きましょう。（数字番号は岩波書店の日本古典文学大系72巻菅家文章・菅家後集の詩番号です）

② 石井橋付近から

(218、232、233、287、310)

この先は今、ダム湖となっていますが、かつては大きな石がゴロゴロしていた溪谷

でした。私が子供のころ（昭和20年代ころ）、滝宮の牛の市に通っていたくねくねした道も川筋にありました。この小道を馬で散策したみちざねさん、たまたま午後には暇ができたので、南山の近くの山間に散策に出かけた。馬上から花が咲いた枝に腕を伸ばして折ったり、青い水の流れを見たり、くねった細道を過ぎると少し地形が広くなり、正面に山が見え、ちぎれ雲に乗れるような気がしたりと読んでいます。今の風景では、南山はこの南側のてんまさん（鶴亀山）、くねった細道を過ぎて川の上流の広くなった場所は、この先の小原こばらの里を描くことができます。上流左岸部分には、雨の降った時には綾川へかなりの落差で落ちてくる滝もありました。駅舎で寝ている馬子がはっと目が覚める山寺の鐘の音は、南海道があった額坂の横山の山頂あたりにあった古い寺の鐘の音が谷筋をわたってきたのではなかったでしょうか。

③ 石井の河内駅付近 (221、258)

石井に南海道の河内駅があったと子供の時から言われています。もし、南海道がこの場所を通っていたとしますと、三谷駅、河内駅こうち、額坂を越えて善通寺へ向かう一番の目印として開法寺の塔もよく見えていたでしょう。駅家には讃岐うまやを東や西方面へ往来している人たちが集まり、当時の社会のいろいろな情報を聞くことができます。南山の麓に住んでいる白髪頭のおじいさんから聞いた話など紹介しています。

④ 開法寺に至る (210)

ここが開法寺の塔跡です。西側が開法寺池です。みちざねさんは、押衙門で吹かれる角笛の音を聞いたり、暁に鳴る鐘の音に目が覚めたりしています。朝早くから法要など行事が多かった府庁の人は、朝の早いうちから活動しています。ここでは開法寺の場所や国衙の場所が描かれています。

⑤ 鼓岡つづみがおかに至る (193)

着任して初めての秋、空が青みを増して雲が淀んだ空気も消え、黄昏の空に昼間の余韻が残っている時、国衙を出て、西をかえりみて寺を訪ねて上方に登って出てくる新月を待つ。つまり開法寺の横を上がって今の鼓岡に来て、そこで月を今か今かと、つまさき立って待っているのではないか。みちざねさんの赴任早々の気持ちが伝わってきます。

この岡からは、国衙の塀の向こう側に川が流れて平らな砂原が拡がり、大きくくねった入江や、川舟の運送を扱う人たちの草ぶきの家の屋根、国衙の倉庫や倉の建物が見えらる様子が見えるのでしょうか。私もこの詩を読んでこの場所、この季節、

この時間帯、日の出、月の出入りなどまさしくこの地形と時を共有することができます。東・西・南に山があり、北側には平野が広がり、その先は瀬戸内海の島々が見えます。子供のころは、この綾川は砂原が一面に広がっていました。花崗土が風化した、きれいな砂が一面に見えていました。海の砂とは違います。昔、川のそばのクボチあたりはたんぼにできないので、桑畑になっていた時もありました。綾川が流れているこの場所は詩を書くのに素晴らしい風景・場所だと思います。

東方向の東山（蓮光寺山）の向こうは、国分寺、国分尼寺があります。国司として国分寺へ行くのは重要な仕事のひとつでした。

(191)

国司の仕事として金光明寺（国分寺）へ仁王百講会に出かける

(257)

法花寺（国分尼寺）の白牡丹を見る

(222、296) 松山の館

また、海の方を見ますと、綾川下流の瀬戸内海に面したオン山（雄山）・メン山（雌山）辺りには松山の津や国津など港があって、松山の館も風待ち・潮待ちの旅舎としてオン山裾辺りにあったのではないのでしょうか。その南には骨まで冷えそうな水が流れている神谷川の溪谷沿いに神谷神社（坂出市神谷町）があります。谷筋の冷たい風がオン山の館まで吹いてきたのでしょうか。

⑥ 城山神社に向かう

(192、196、211、215、219、225、270、273、274、275、306、307、312、313、314、315、316、318、321)

神社境内には城山の神に祈った祭文（525）の石碑がある。

神社境内から見下ろすキタ谷（坂出市府中町北谷）の傾斜地に官舎があり、景色が見渡せたのではないのでしょうか。官舎は低く、山の側にあり、山に囲まれています。茅葺の草堂で三間の広さ、前の小さな畑の脇には数本の竹が植わっています。北の窓があり、すぐそばを樵たちが歌いながら山から帰る道があるので、そう遠くない所に庶民の住む家があることが想像できます。また、草堂は近くに水の流れがあって、雨の後は谷川を流れる水しぶきの音が聞こえています。窓辺に座って月を待ったり、一人の漁師の爺さんが川近くの砂原にポツンと立っているのが見え、遠くには家のたいまつが見えます。月の光が町々に満ちています。

朝出勤する時は、朝日がキラキラと輝くなどの風景が見え、東の方向へ官舎から府衙に向かったと想像できます。また、夕立がきて蒸したような夏雲がわき起こり、

役所から帰る途中、南側の駅亭の屋根の上に3つの鼓楼が見えているなど今でも同じ思いに浸ることができる風景が残っています。

⑦ 蓮池に行く

(262)

国衙の北の門外にある小さな池、そこは谷から流れてくる溜まり水の中、蓮の輝くばかり美しい花があります。蓮の花はもともとインドなど南方の暑い所の花で、当時は暑い夏が続いており、日照りの時には、大きく花開いたのではないのでしょうか。この花に感銘を受け、讃岐28寺に蓮を植えたことなどが詠まれています。今の地名では、現在田んぼとなっている池田の場所がそうではないかと思えます。

⑧ 国衙の北エリアを歩く

(195、197、214、216、247、249、266、281、283、288、297、299)

クラマエ、インニャク、テンジンなど地名が残っているエリア。このエリアには国司館や正倉など国衙の管理施設が多く建っていたのではないのでしょうか。テンジンの地名が残る所は、国司館が考えられ、ちょうど松山の津から国府に至る往還（馬さし大貫）の横に建っていたのでは。

ここからは綾川の砂原も近く、川舟の運送人や漁師、村人など多くの人が集まり交易する所でもあったのでは。すぐ北側には地名でオオマチという所もあり、賑やかな町の雰囲気詩から伝わってきます。元旦の内宴の時でも国衙の守館から見渡すと潮がさしひきする中、家が建ち並び、耳に聞こえてくるのは運送人の舟歌ばかり。これらの詩からは、綾川が曲がって流れる内側には江があり、砂原があり、倉や家々が建ち並んで多くの人に住んでおり、そのすぐ近くに官舎など施設があったことが想像できるでしょう。酒好きでない(?)みちざねさんも憂いを消すために綾川の江のほとりに出て少しの杯の酒を飲み、近くの江亭で酔ってしまったとも詠んでいます。

では、これで菅原道真さん(845年～903年)が讃岐の国司として着任していた時代(886年～890年)をしのんで、センターまでの帰途の道につきます。

(ガイド役は梶でした)

参考文献

日本古典文学大系第72巻「菅家文草・菅家後集」(岩波書店)

軍王が見た山 「謎の古代山城・城山を歩く」

梶 英憲

コース概要

①ドライブウェイ（城山登山道）

今、歩いているこの道は、山頂に向かうドライブコースとして新設され、1954年（昭和29年）にJR鴨川駅方面から着工されましたが、城山明神原^{みょうじんぼら}まで開通したのは1961年（昭和36年）のことでした。1954年（昭和29年）9月には、城山ゴルフ場（高松ゴルフ倶楽部）がオープンしました。地元の若い奥さんたちもキャディとして働いていました。城山はその名の通り、城の山と呼ばれ、昔から城の遺構があることが知られていました。終戦後には開拓村が作られ、10年も経たないうちにゴルフ場ができました。開発が進む前には石塁や土塁、礎石などそのラインがはっきりと見えていました。昭和30年代までは、まだまだ地元の村民が山を生活の場として使っていました。昭和40年代に入るとゴルフ場は賑わっていましたが、山そのものには年々人も入らず荒れ果てて行き、歩いて登っていた山道も埋もれてしまいました。

下から頂上まで車では15分もかからないのですが、歩くと1時間以上はかかります。

②綾北展望台（ケーブルテレビ塔）

ここからの景色は瀬戸内海から国分台、下方には綾川、国府跡、陶（綾川町陶）^{すえ}方面、そして国分方面、六ツ目山、鷲の山、遠くには屋島、五剣山などが遠望できます。綾川周辺には古墳群が点在し、鴨廃寺、醍醐寺跡、開法寺塔跡、讃岐国府跡、陶の窯跡群、東の方の白山（木田郡三木町）から六ツ目山、新宮へ向かって進んでくる南海道ライン、円座や国分の荘園地が望まれます。また、海寄りには高屋方面に松山の津、国津など港、林田や加茂の条里地割が望まれます。白峯さん（札所の白峯寺）も見えます。それぞれの所には旧跡・遺跡が残っています。石器の材料となるサヌカイトが採れる国分台や、穴薬師（綾織塚）古墳、新宮古墳、弘法寺古墳などが築造された古墳時代の300年間、松山の津、国府で賑わった奈良・平安時代の500年、1362年（正平17年／貞治元年）の白峰合戦の古戦場など時代を超えた歴史が見渡せる所です。

③ 明神原の巨石群

ここは、たこのあたまと呼ばれている所です。古代の^{いわくら}巨石、祭祀場跡です。讃岐国司として赴任した菅原道真が888年（仁和4年）に雨乞いをした所です。この20[㍍]ほど下方には山城を築いた当時の車道の跡が残っています。

④ ホロソ石・カガミ石・マナイタ石・石列跡など

倒木などを取り除くと石列が出てきました。この石列を基礎にして上に版築して固めた土塁があったのではないのでしょうか。ホロソと呼ばれる石には、門の柱を建てるためのほぞ穴が加工されています。カガミ石やマナイタ石も門の礎石です。石列やこれら石の測量はまだされていません。また、所々に安山岩の塊や風化したサヌカイトが点在しています。この先を尾根沿いに北西方向に歩くと城門の石垣に出会います。ただし、今はゴルフ場コース内ですので許可が必要です。ゴルファー達にとっては、この城門の石垣の間をカートで抜け、瀬戸内海に向かって球を打つことのできる気持ちのいいコースです。1350年以上も前の石垣とは思ってもいいでしょう。

⑤ 城山頂上展望台

標高462[㍍]の頂上です。眺望がよく、讃岐富士から金毘羅さん、瀬戸内海、岡山の鬼の城、南は遙か剣山の方まで見渡せます。ここにも礎石が残っています。建物の基礎でしょうか。南側へ下がっていった先テラス状の所には方形の石積み遺構やマナイタ石もあります。また、ここから下方の川津方面から登ってくる道沿いに石塁の跡が残っています。カントリーハウス近くには石塁に作られた水口が今も当時の姿のまま、水を流しています。山城の城跡を囲むいわゆる車道は二重に築かれていて、総延長は7[㍍]を超える長さで、大規模なものです。

城山はいつ造られたのか、だれが築いたのか、謎です。わかっていません。屋嶋城については日本書紀に667年（天智天皇6年）という年号が記されています。城山はわかりません。備讃瀬戸のここら辺は瀬戸内海でも最も幅の狭い所です。対岸まで7~8[㍍]です。潮の流れも速く、風待ちや潮待ちが必要で、西風を避ける港が必要です。

かつての日本は西暦300年代から663年（天智天皇2年）の白村江の戦いに敗北するまで300年以上、隣国の百済、新羅などの国々と行き来が活発で、大和政権の時代には海外侵攻が繰り返され、瀬戸内海は多くの兵船が行き来していたと私は思っています。筑紫から朝鮮半島に出兵して新羅を攻めた神功皇后が船泊まり、風止まりに立ち寄ったという礎石がある^{とうかん}東梶・^{せいかん}西梶史跡も林田に残っています。讃岐で和歌を詠んだ軍王も潮待ちに立ち寄っています。倭国は百済の国とは関係も深く、渡来の人たちの優れた文化や技術を積極的に取り入れ、国づくりに活かしたと思われま。阿野郡も綾氏ら渡来人の優れた技術や能力が発揮された土地かも知

れません。城山の遺構も渡来の技術を活かしているようです。後の讃岐の国司にも百済の子孫と思われる人物が着任しています。古代山城は、いざという時の逃げ込み城です。城山軍団がいた山城も管理施設は山の下にあったと思われます。

讃岐の国は大和の政権にとって重要な国（上国）でした。米、布、紙、矢竹、皮製品、塩はもちろん、須恵器、瓦、円座、石材、灯明の油となるエゴマ、薪など生活に欠かせない物資が豊富に求められていたと思われます。それらを供給する上国として、大和には必要な国だったでしょう。また、瀬戸内海の船の航路の東と西を結ぶ潮待ち、風待ちの拠点として各地のさまざまな情報が入手でき、世の中の状況がよくわかることも、すぐれたお坊さんを輩出した一因、そして讃岐の文化の下地になったでしょう。

古代山城の時代を考えるには、当時の半島隣国との関わりを考えることが欠かせません。いつも城山の展望台から眺める時、目の前の瀬戸内海や綾川を見ていると、大槌・小槌の槌の門に出てくる悪魚退治の讃留霊王伝説、綾氏の時代、国府の時代、足利・細川氏の時代、毛利・信長の瀬戸内制海権の争いなど常に海とともに時代を経てきたこの地の歴史を思い描いています。綾川の流れは絶えずして、しかも元の水にあらずです。

（ガイド役は梶でした）

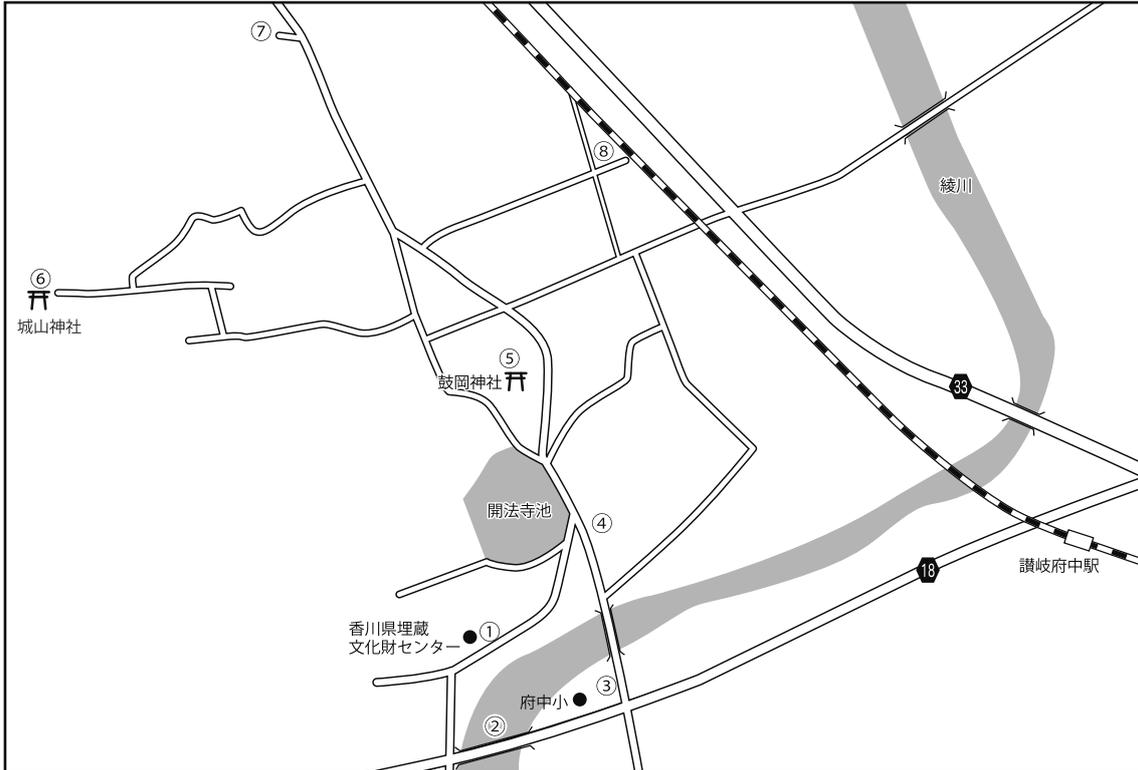
讃岐国安益郡に幸^{あやのこほり いでま}せる時、軍王の山を見て作る歌

霞立つ 長き春日の 暮れにける わづきも知らず むらきもの 心を痛み ぬえ
こ鳥 うら泣き居れば 玉襷^{たまたすき} 懸^かけのよろしく 遠つ神 我が大君の 行幸^{いでまし}の
山越す風の 独り居る 我が衣手^{ころもで}に 朝夕^{あさよひ}に 還らひぬれば 大夫^{ますらを}と 思^{われ}へる我
も 草枕 旅にしあれば 思ひやる たづきを知らに 網の浦の 海人^{あみ} 処女^{あま}らが
焼く塩の 思ひぞ焼くる 我が下情^{あしたごころ}（万葉集巻1第5番）

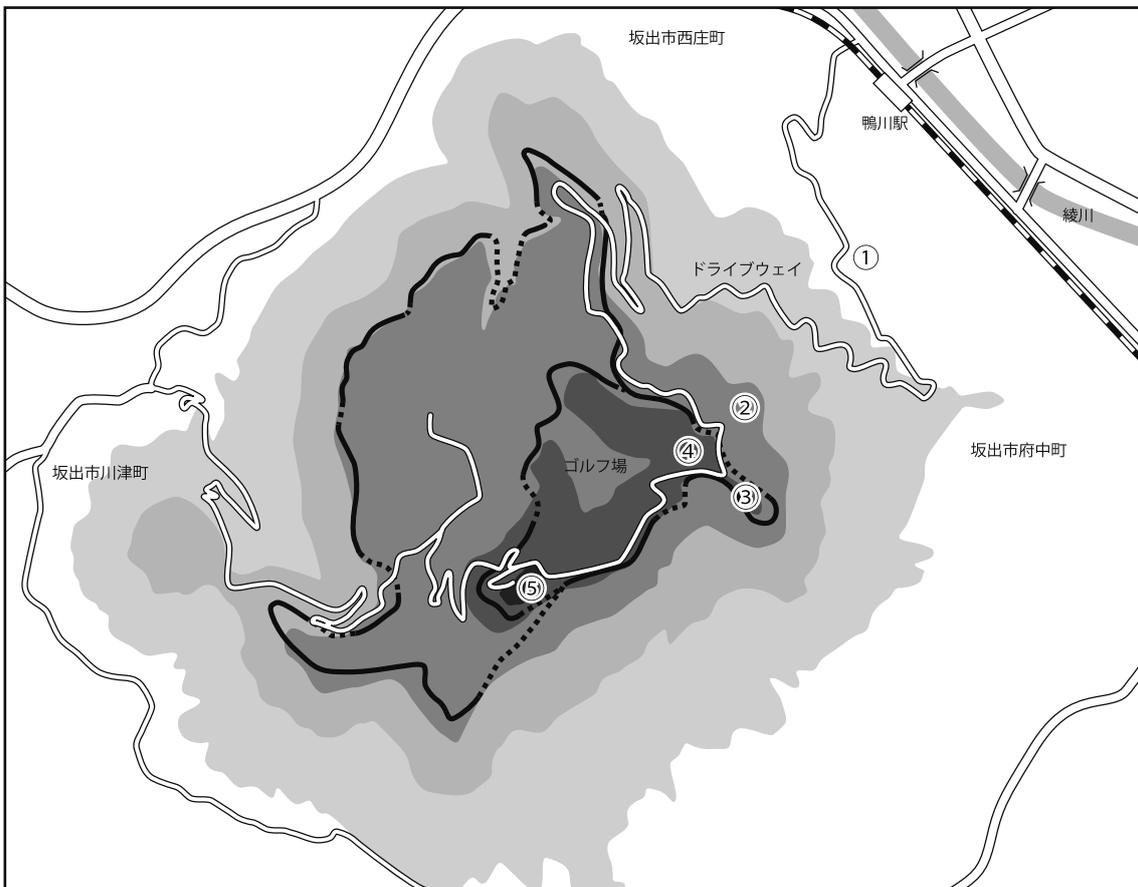
参考文献

香川県史ほか

★国府まち歩きでは、みちざねさんの気持ちに近付くため、当時の時代の雰囲気を出したいと思い、神社の秋祭りの神輿担ぎの衣装を着用しました。参加した方たちと共に謎解きのおもしろさはもちろんながら、次の世代の人たちに受け渡さなければいけないこと、たとえば先祖の人々が歩んできた道、故郷の歴史、風景、など子供たちに伝えることが数多くあります。また、時代が変わっていくなかで変わらないもの、そして伝承のなかに新しく発見するもの、忘れた記憶のなかで思い出すもの、それを地元に住むボランティアとして伝え、この景色を歩きながら共有できればと思っています。（梶：談）



▲「菅原道真が見た讃岐国府の風景を歩く」コース地図 ※図中の番号は文章に対応しています



▲「謎の古代山城・城山を歩く」コース地図 ※図中の番号は文章に対応しています

時間を超えて歴史を旅する

「国府（昔の県庁）の里 阿野郡・府中村を歩く」

池浦 健一

コース概要

① 埋蔵文化財センター玄関

現在の坂出市府中町の人口は4686人、世帯数は1682世帯（市全体の人口は5万3918人、世帯数は2万1384世帯）。1954年（昭和29年）に府中村は坂出市に合併、府中町となりました。地域の歴史を語る府中村史は、元村長を務めた栗林三郎さん（1885年～1973年）が執筆し、1963年（昭和38年）に発行しました。

930年（延長8年）から938年（天慶元年）に編集された倭名類聚抄^{わみょうるいじゆしやう}によると、讃岐は11郡89郷。この資料に「国府阿野郡に在り」と書かれています。当時の阿野郡は、新居^{にい}、山田^{はゆか}、羽床^{こうち}、甲知、鴨部、氏部、山本、林田、松山9郷に分かれており、この府中は阿野郡甲知郷に入ります。

11郡のうち、香川郡と阿野郡は2つに分けられ、1143年ころには阿野郡南条・北条に分かれ、さらに南北朝から室町時代（1300年代）に入ると阿野南条郡・阿野北条郡に変わります。1612年（慶長17年）の文書史料と1642年（寛永19年）の讃岐国小物成帳では南条郡府中村と呼ばれ、ようやく府中^{ふちゆう}の名前がでてきます。1872年（明治5年）には、もともとの阿野郡に戻り、阿野郡府中村と呼ばれました。1899年（明治32年）に阿野郡と鵜足郡^{うた}が合併して綾歌郡になりました。では出発しましょうか。

この香川県埋蔵文化財センターは1987年（昭和62年）にオープンしました。国府を見渡すこの場所に建設されたことは何かの縁があるかもしれません。この下の川が綾川です。ここにぶつかり、東に流れ、あっちでまたぶつかって北の方向（瀬戸内海まで約7キロ）に流れていきます。この正面の削られている標高80㍍程の山（鶴亀山）が道真の漢詩にでてくる南山^{なんざん}ともいわれています。このあたりのランドマークは、城山（462㍍）の明神原^{みょうじんばら}（通称タコのあたま・413㍍）です。あそこには大きな石があり、イワクラ、祭祀跡といわれています。

あちらに見えるのは高松市御厩町^{みまや}の方の六ツ目山（317㍍）。この六ツ目と城山を結ぶラインがちょうどほぼ真東一西の方向です。

② 石井橋まで来る

石井橋上流800[㍓]ほどにある府中ダム（850万^ト）は、1964年（昭和39年）に着工されました。1967年（昭和42年）3月から湛水が開始されました。満濃池（1540万^ト）の半分くらいの貯水量です。番の洲の工場で使う工業用水や灌漑用水です。移転した戸数は109戸、ダムは1985年（昭和60年）に府中湖となり、今ではカヌーの国際競技場となっています。このダムは海岸線から8^キほどで海から最も近い所に建設されたダムかもしれません。

③ 石井地区・堺石

古代南海道の駅家・河内^{うまや こうち}駅があったといわれる石井地区です。古代の官道、南海道は701年（大宝元年）の大宝令で整備が規定され、718年（養老2年）ころまでには整備されたといわれています。東は国分寺六ツ目から国分まで西へ一直線、前谷^{やまのうちがよう}の山内瓦窯跡近辺を通過して新宮、石井へ。河内駅から西方向の額坂へ。想定南海道ラインが西伸びます。

堺石^{さかいいし}は、もとは旧府中村役場近く、石井1172番地にあったものが1980年（昭和55年）ころ現地に移転しました。1818年～1830年ころ（文政年間）田んぼの邪魔になるので打ち割られ1.5[㍓]ほどあったのが小さくなったとのこと。土地のエリアを示す境界の標識・目印でしょうか。石が置かれて居たからか、地名は石井です。1925年（大正14年）7月に村役場と府中小学校（明治19年開校）に電灯が初めて点いています。

④ 新宮古墳へ行く

2013年（平成26年）9～10月の調査では、一辺20[㍓]の方墳で横穴式石室の長さは12[㍓]。特徴は奥の玄室の手前に前室という空間があること。玄室の入口に立柱石が左右にあること、前室とせん道の天井石は失われていることなどがわかりました。聖徳太子の時代、500年代の終わりに築造されたと考えられます。1957年（昭和32年）に市の史跡に指定されました。出土遺物は須恵器や金環など鼓岡^{つづみがおか}文庫に保存されています。城山神社が本宮で、こちらは新宮^{しんぐう}という地名になりました。県史では永承年間（1046年～1053年）の藤原家経（当時讃岐国司）の建立とされている新宮八幡さんが鎮座しています。当時の石清水八幡宮の荘園管理を反映しています。1918年（大正7年）の洪水では、神社の石段3段目まで浸水しました。2004年（平成16年）の台風の時も綾川の水があふれ出し、下まで水が来ました。

新宮古墳からは、条里が綾川下流域に広がっています。条里は地割で109[㍓]四方の正方形メッシュの方格線（センパク）という土地区画の地割です。研究者の話では、8世紀ころまでには全国で条里が整備されたと考えられています。特に香川

の条里は、古代官道を基準に縦列する形をとっています。綾川下流域条里は^{おんやま}雄山・^{めんやま}雌山あたりをランドマークにラインが引かれています。そのラインが綾川を横断して国府跡の国庁碑そばに伸び、石井にきています。下流域には加茂、氏部、延喜式神社の神谷、林田、松山など古代からの地名が残っている場所が点在しています。

雄山（139[㈬]）雌山（164[㈬]）の頂上には併せて8カ所の積石塚古墳があります。烏帽子山（246[㈬]）は今、採石で山頂自体がなくなっていますが、山頂には巨石祭祀あと、石器や弥生土器などが散乱していました。山の南斜面標高76[㈬]には綾織塚古墳（横穴式石室）、ふもとはに鴻池、山ノ神、鷺の口など加茂古墳群20基近い古墳があります。古代寺院の鴨廃寺もあり大きな礎石、塔跡の礎石が残っています。手前の鶴ガ峰の頂上には古墳があり、ここから人骨がでてきました。5世紀後半（400年代後半）ころの古墳ではないかと考えられています。

綾川左岸の城山側では、海寄りの西庄に醍醐古墳群、ここも10基以上の横穴式古墳、さらに古代寺院跡の醍醐寺跡の基壇が残っています。手前の府中では弘法寺の積石塚古墳が3基、ここも人骨や鏡、勾玉などがでており、タイバイ山は前方後円墳、白砂古墳、鼓岡古墳など、ここから見える所には50近い古墳が集中しています。古墳に続く時代の開法寺跡、鴨廃寺、醍醐寺跡などはいずれも氏寺のようで、エリア内で有力な支配者（綾氏ら）がいたということだと思います。では次は讚岐国府エリアに向かいます。

⑤ JR讚岐府中駅でトイレ休憩

JRは丸亀～高松が1897年（明治30年）2月に単線で開通しています。讚岐府中駅と八十八場駅は1951年（昭和26年）に新設され、1968年（昭和43年）9月によく国鉄（現在のJR四国）国分～鴨川が複線化、SLは1969年（昭和44年）9月30日が最後で電化は1987年（昭和62年）3月です。1988年（昭和63年）には瀬戸大橋完成、マリンライナーが走っています。単線の時のホーム跡はこのあたりです。

この近辺では、古代寺院の安楽寺（平田山山頂に墓石あり）跡や1933年（昭和8年）に発掘された1100年ころの経筒（東京国立博物館所蔵）、妙楽寺跡（大正13年古銭の入った壺を発見）などがあります。いずれの寺も長宗我部元親が1580年ころ焼き払ったとのこと。また、南海道の^{うまや}駅家では石井の駅とはべつにこの東側の谷筋（前谷）から新宮区間の赤沢病院の近辺（坂出市府中町前谷）にも条里跡があります。駅家を維持する田ではないかという説もあり、駅家を想定しています。

⑥ 綾川大橋を渡る

この綾川大橋は、1956年（昭和31年）10月に当時の国道11号の橋として建造、

その時にこの先1000㍍ほど国道が新設されました。この先の雇用促進住宅、JA香川県府中支店の辺りからは古代瓦・土器が数多く出たとのこと。下流の綾坂橋は現在新しい橋を建造中、今年完成です。2004年（平成16年）の大雨の時は欄干を超えて水が流れていました。

⑦ インニャクの碑など北エリアへ行く

1916年（大正5年）にはインニャクの碑、柳田の碑は1921年（大正10年）建立。大正年間には古代の史跡が一気に地元の誇りとして盛り上がった時代でした。さきほどのオン山メン山から鶴亀山（南山）のまんなかを結ぶライン上にあるあぜ道を南北基準線とみている専門家もいます。2010年（平成22年）度の発掘でこのあぜ道横から馬さし大貫と呼ぶ幅員10㍍の往還道路の東側溝、石敷の遺構がでています。インニャクの碑の向こう側はテンジンという地名。西側はクラマエ、南がチョウツギ、そこの雇用促進団地の南もチョウツギ、柳田の向こうの農道向こう側がオオマチ。西側で見えないが国衙の北の門を出た先にはハスの池（今はイケダ）があります。テンジンはみちざねさんの官舎、チョウツギは事務をする施設、クラマエは倉庫や倉の前かもしれません。

これらの場所は市役所府中出張所で見つかった江戸時代の1805年（文化2年）の検地帳、阿野郡南府中村田畑順道帳（検地帳）や明治の壬申地券千引絵図（本村部分が見当たらない）・改正地引絵図と現在の地籍図を照らし合わせることでわかりました。さきほどの地名は江戸時代の終わりころ、文政2年の検地帳にあった地名です。うちひとつインニャクだけは江戸期の検地帳にはのっていませんでした。農道の南側のたんぼでは総柱建物のあとがみつき、倉庫の可能性があるとのことです。検地帳にはのってませんが、ワンツカの所は皿や膳具が多く出土する所です。その横がセイドウという地名もあります。さらにその向こうはセド。なんらかの後という意味か、不明です。

⑧ 現在の開法寺

ここに現在の開法寺があります。開法寺池から発掘された地蔵が安置されています。以前の寺は西側の石垣の所にありました。地名はホムラヤシキ。その石垣で囲まれた高台は、江戸期の大庄屋で高松藩の馬術師範でもあった吉川氏宅。吉川氏の出は毛利家の家老です。1583年（天正11年）秀吉が毛利に長宗我部討伐を命じ、讃岐に吉川と小早川の軍がきています。周辺には吉川4人組といわれる戦国時代を連想させる家もあります。吉川氏は菩提寺の徳清寺を引き連れてきており、1587年（天正15年）から生駒の時代に国分に移った真宗派寺院が今の寺です。西側を通るのが府中町を潤す四手池用水、この下手側に内裏泉があります。

⑨ 鼓岡

この岡は3段になっている円墳ではないかともいわれています。昔からよく古墳が神社になったり、お寺や神社のあとが池になったりしています。ひょっとすると古墳があるかもしれません。発掘はされていません。崇徳上皇（1119年～1164年）が讃岐に配流された1156年（保元元年）から亡くなる1164年（長寛2年）まで居たことは注目されます。ここに小さな祠を建て今に至ると、室町時代に書かれた白峯寺縁起に記載されています。その後、祠は荒れ果てて1877年（明治10年）にようやく村社、鼓岡神社になりました。明治時代に入り、皇室に関係するそれ相応の社格を整えるため、鳥居を1898年（明治31年）建立しました。そして府中村では上皇750年忌祭りに向けて、明治31年に村長に着任した藤井亀三郎（1867年～1944年、銅像が府中小にあり）が皇室に関係ある史跡として1899年（明治32年）から運動を進め、1903年（明治36年）には鼓岡の碑、鼓岡聖跡顕彰会を1909年（明治42年）に組織し、1913年（大正2年）に擬古堂を建設して750年祭を盛大に催しています。観音堂には奈良時代ともいわれる千手観音や法然上人、地藏菩薩などありましたが、1998年（平成10年）に盗難にあいました。今は府中村史に写真が残るのみです。鼓岡文庫は1928年（昭和3年）に建設され、古墳から出た遺物、国府の瓦や土器、江戸、明治期の書籍などが保管されています。

この崇徳上皇が亡くなられて後（暗殺説・柳田の碑）、西庄にある八十場の空海が創建したと伝えられる摩尼珠院（明治4年に廃寺）今は札所の高照院天皇寺になっていますが、この寺に遺体が運ばれたという説があります。寺の横には衛土坊の坂という地名も残り、宮家を警護監視する警備兵が毎日通った坂らしく、何年も通っていたのでその名前が残ったと言われています。また、上皇についてきた侍人（^{えしにん}）の家もあり、白峰など祭りの時は必ずその家が何かの役割を担当しました。20家近くが続いており、福江町や御供所（聖通寺山の平山の所から丸亀に移る）にあり、府中の石井の徳田家もその侍人の家だといわれています。今年2014年は上皇850年忌祭の年にあたります。

⑩ 讃岐国庁跡碑に行く

1926年（大正15年）4月に建立式典が催されました。88年前です。文面（1922年・大正11年）の拓本は鼓岡文庫にあります。式典で鎌田共済会の岡田唯吉が「讃岐国国府遺跡考」を講演、後に冊子を発行しています。鎌田共済会は鎌田勝太郎（1864年～1942年）が作ったもので、1922年（大正11年）に鎌田共済会郷土博物館を建設しました。この博物館は今も残っています。

これらは明治大正期の時代を担った動きの一環。特に1919年（大正8年）には史跡名勝天然記念物保存法が施行され、国が全国各地の史跡名勝候補地を選ぶよう命令しました。府中村でも国府、古墳、崇徳上皇関係などの報告書を提出しています。これ

らの動き以前には、赤松景福（1864年～1948年）が1916年（大正5年）12月から翌年3月にかけて、現在の四国新聞にあたる「香川新報」に府中史跡の連載を掲載しています。府中は、それまでにも江戸期の西庄の大庄屋本條貴伝太の「綾北問尋抄」（1755年）、中山城山（1763年～1837年）の全讃史（1828年）、讃岐国名勝図絵（1853年）、明治42年の旧香川県史などに、国府は府中にあると採り上げられています。また、昔からこのあたり一帯の田んぼの耕作の時、瓦や土器片が多数見つかっています。碑文には紀夏井^{きのなつい}、藤原保則^{ふじわらのやすのり}、菅原道真らの名前、神櫛王^{かむくしのみこ}の名前などが書かれ、当時の村長・藤井亀三郎をたたえています。また、裏面には寄付をして支えた地元の人、11人の名前を刻んでおり、1925年（大正14年）12月建てるとなっています。

⑪ 発掘現場に行く

国府エリアは東西600㍍、南北700㍍、東と南が綾川ライン。先に行ったのは北エリアで、ここは南エリア。想定では北エリアに官舎や倉庫、倉など施設、南エリアに国府の政庁があるようです。調査は1976年（昭和51年）の坂出市教育委員会の第1次調査からスタート、平成25年度の第31次調査まで行っています。うち2次から8次が県教育委員会、9次から26次が坂出市教育委員会、27次（2009年）から30次（2012年）が埋蔵文化財センターの讃岐国府跡探索事業で実施されました。この南エリアでは国府の中核施設の柱跡、溝跡、築地か板塀跡、奈良平安時代の瓦ぶきの建物の柱跡が出ており、2013年（平成25年）2月の記者発表で「国府の場所が特定された」と発表、全国に報道され、2月には現地説明会、1000人を超える人が見学しました。府中はじまって以来の今までにない出来事でした。国府といっても奈良時代の700年代から平安時代末の1100年代の500年ほどの長期間にわたって築かれた施設群エリアだけに柱穴跡や瓦・土器も数多く、収蔵庫にはコンテナ600箱以上の遺物がありました。

このあたりはカキノウチという地名があります、これは開法寺の寺域を示すものでしょうか。皆さん驚くのは田んぼの中に国府の跡がいまだに残っていること。発掘は家などがあるとできません。ここの発掘は、田んぼの地権者の協力を得て実施、7月ころ交渉に入り、打ち合わせを進め、秋の稲刈りが終わって11月から翌年3月まで4～5カ月の間に発掘、3月には埋め戻しをしてもとの田んぼにして、返します。田んぼは表面30㍍ほどはあまつち（耕作土）があります。これをユンボで削り、次にユンボのバケット先で水平にかいていく作業に移ります。するとすぐ土の色が黒っぽくなり柱穴跡や、中にはガリッと瓦にあたる音がすることもあります。それから手作業でいわゆるガリかけ、このあたりでは50㍍の深さから遺物が出てきます。

⑫ 開法寺塔跡に行く

伽藍の配置は中門、講堂、僧坊（塔跡北側70㍍で発掘）など建物の中心軸が条里ラインに乗っており、700年代前半の条里地割が進んだころの建設ではないかともいわれています。壇上積み基壇の形は700年以降が普通だと聞いています。心礎も周りの礎石と同じ高さです。地中に埋められる飛鳥寺など600年代の寺とは違うと思います。東西42㍍の範囲が回廊で囲まれ、金堂が内側（東側）に向く福岡の観世音寺式（ほか多賀城廃寺）とよく似ています。塔跡周辺は瓦だまりが耕作土の下70㍍辺りから出ています。また、現在、第31次調査として塔跡近隣の東北側で寺域と国衙エリアの境界となる塀跡など発掘作業が進められています。今後の調査報告が期待されます。

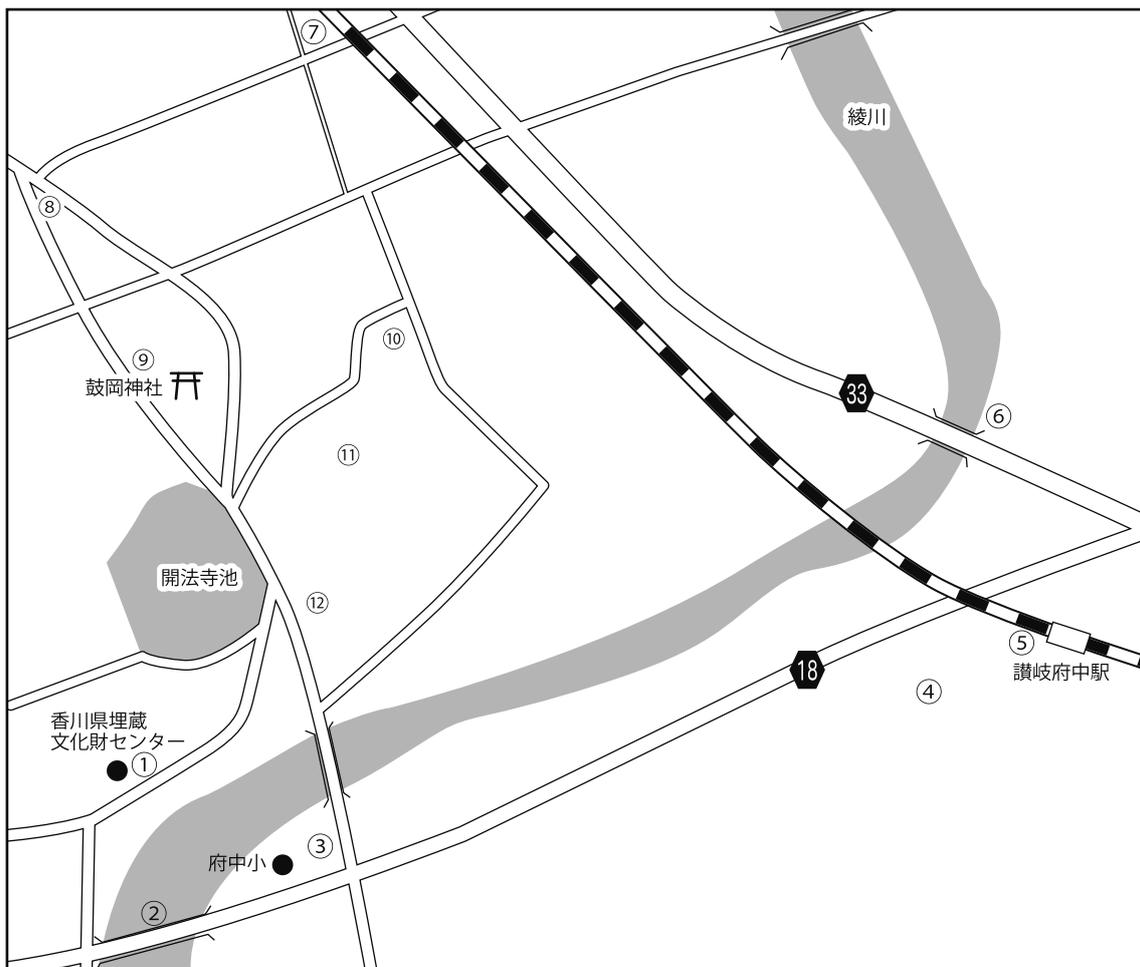
（ガイド役は池浦でした）

参考文献

香川県史、府中村史、香川県立文書館紀要、埋蔵文化財センター研究紀要・調査報告書などほか

★この府中ではサヌカイトの石器、古墳時代から古代寺院・古代山城の城山、讃岐国府、崇徳上皇まで、これら時代が連綿と続く史跡が大きなポイントです。特に讃岐国府は、700年代から1200年代まで500年近く同じ場所にあり、なかでも886年（仁和2年）から890年（寛平2年）まで菅原道真（845年～903年）が国司として赴任、道真の生活をしたための「菅家文章」が今に残っており、赴任地の府中町周辺の景色が描かれています。これは、ほかの国府地域にはない大きな特徴です。また、第75代となる崇徳天皇（上皇）は、保元の乱で讃岐に配流され、1164年（長寛2年）に亡くなられたということです。上皇に関しては保元物語でつづられています。伝承・口承が多く、文献資料はあまり残っていません。この府中で過ごされた時期がある菅原道真、崇徳上皇おふたりとも死後、怨霊伝説がつくられ、神様とされました。歴史はその時、その時で様々に変化していきます。私たちの人生も変化様々です。過去を学ぶことは不確かなものを確かなものにしたらいというはかない望みかもしれません。次の世代にバトンタッチすることができればこれ幸いです。

（池浦：談）



※図中の番号は文章に対応しています



▲ ⑪ 発掘現場を北から臨む



▲ ⑩ 讃岐国庁跡碑

讃岐国での崇徳上皇の実像に迫ろう

「崇徳上皇の足跡を歩く」

安藤 みどり

コース概要

① 埋蔵文化財センター玄関

保元の乱に敗れた崇徳上皇は、讃岐に流され約9年間罪人として過ごし、この地で亡くなりました。都に帰れないことを恨み、怨霊となったといわれていますが、実は、讃岐配流中の上皇の様子を伝える当時の確かな史料はほとんどありません。多くは、軍記物の「保元物語」のように、後の時代のフィクションが混じったものか、伝承や伝説にもとづいて書かれた物です。今日は、府中町などに残る上皇の伝承地をたどると同時に、当時の文献資料を基に讃岐での上皇の実像を紹介できたらと思います。

上皇は、1119年（元永2年）鳥羽天皇の第一皇子として生まれます。（名は、あきひと 顕仁）母は待賢門院藤原璋子です。ところが、「古事談」という鎌倉時代初期の説話集によると、鳥羽天皇の祖父の白河上皇と璋子が密通して生まれた子で、それを知った鳥羽天皇が「叔父子」と呼んでいたといっています。おそらく真実であろうと思われ、鳥羽上皇が亡くなると、すぐに実の弟の後白河天皇と対立し、1156年（保元元年）武士を巻き込んだ保元の乱が起きます。敗れた崇徳上皇は弟のいる仁和寺で髪を剃って出家します。その後捕らえられ、まさか京都から追放まではされないだろうと思っていたところが、讃岐に配流となりました。

「兵範記」という当時の公家の日記によると、乱が起きたわずか12日後の7月23日には京を出発します。上皇の死後まもなく書かれたかなり信憑性の高い歴史物語である「今鏡」などによると、第一皇子の重仁親王の母の兵衛佐など、わずかに2～3人の女房のお供だったようです。

室町時代に作られた「白峯寺縁起」によると、8月3日に讃岐の松山の津に着き、ひとまず林田の在庁官人綾高遠の屋敷に入り、仮御所とします。一説には近くの長命寺に住んだともいわれています。約3年の後、鼓岡の御所に移って約6年間過ごし、1164年（長寛2年）に46歳で亡くなりました。

今日は、まず御所があったという鼓岡に行き、そこから遺体が運ばれたであろう城山の山裾の古道を辿り、古代の寺院跡や古墳群も紹介しながら、白峰宮、八十場の湧水までご案内します。

② 鼓岡神社と擬古堂^{ぎ ことう}

鼓岡神社は崇徳上皇を祀った神社です。白峯寺縁起によると、上皇が亡くなった後、お側に仕えていた人が御所の建物を白峰に移して上皇の靈廟（頓証寺殿）とした後、鼓岡の跡地に小さな祠を建てたといひます。今は立派な社殿となり、瓦には菊のご紋、御所風に「左近の桜・右近の橘」を植えています。

歌碑とほととぎす塚も建立されています。上皇は歌の上手で、讃岐に来てからも多くの歌を詠んだと思いますが、上皇の歌として確かなものはあまり残っていません。階段の横に、上皇の歌碑が2つあります。1つは小倉百人一首にも入っている有名な歌です。「瀬をはやみ 岩にせかるる 瀧川の われても末に あはんとぞ思う」

もう一つの小型の五輪塔（2基）が、「ほととぎすの塚」です。上皇がここに滞在していた時「啼けば聞く 聞けば都の 恋しきに この里過ぎよ 山ほととぎす」と詠むと、これに感じたのか、その後、鼓岡や白峰付近ではほととぎすが鳴かなくなったという伝承があります。ただし、この歌は上皇の詠んだ歌ではないようです。

擬古堂横、階段の上に立つと、東方向に見えるのが讃岐国庁碑です。今年の2月に讃岐国府の中心の国庁と思われる遺構が見つかったと発表されたのが、その斜め右南側の方の水田です。上皇は罪人として国司の監視を受けました。この時代も国府は機能しており、国府の目と鼻の先の岡の上に御所を置いて、監視したのでしょう。ここに移ってからは、窮屈な暮らしになったようです。

「今鏡」によると、ここでの生活は兵衛佐など女房 2～3 人だけの生活で、上皇を訪ねてくるものも無く、大変さびしいものであったようです。また、上皇の歌などからは、世のはかなさを感じ、ひたすら極楽浄土への往生を祈りながらひっそりと穏やかに晩年を過ごした様子が伝わります。そして、病気が年々重くなって亡くなったと書かれています。

この地には上皇暗殺説があり、江戸時代の「讃州府誌^{さんしゅうふし}」という地誌にその伝承が書かれています。しかし、都の後白河上皇や二条天皇にいまさら暗殺しなければならない理由はなく、また、暗殺してさらに怨まれて怨霊になられでもしたらかえって困ることになるのだから、暗殺はありえないでしょう。

隣の建物が擬古堂です。上皇の御所は、木の丸太でつくったような粗末なものであったといい、「木の丸殿」と呼ばれていたそうです。この擬古堂は、1913年（大正2年）、上皇の750年祭の記念に「木の丸殿」に擬して府中村が建てたものです。境内にある鼓岡碑（鼓岡行宮旧址碑）は1907年（明治40年）、国庁碑は1925年（大正14年）に建てられました。明治の終わり頃から大正時代にかけて、ここ府中村では、国府や崇徳上皇に関する遺跡の顕彰が盛んに行われたようです。

上皇が亡くなったのは、1164年（長寛2年）8月26日のことです。国司は直ちに都に報告し、後の指示を仰ぎます。その間、上皇の遺体を八十場^{やそば}に移し、柩を安置したといひます。

③ 内裏泉

鼓岡の北のふもとにある霊泉で、上皇が滞在中、飲用に供したとのことで、内裏泉といいます。

④ 菊塚

上皇の皇子を葬った墓。伝承では、在庁官人綾高遠の屋敷に滞在中、高遠の娘との間に女子と男子が生まれたとのこと。男子は^{あきすえ}顕末（幼名菊王丸）と名づけ、菊の紋をつけて高遠にお与えになり、綾家の跡を継いだといわれます。

⑤ 鴨川駅

JRの鴨川駅です。近くを流れているのは綾川ですが、上皇が都を懐かしんで京にゆかりの名である鴨川・東山・西山などと名付けたといい、その名残を今も駅名に残しているのです。

ここから、近世の丸亀街道に入ります。丸亀街道はお城のある高松と丸亀を結んだ街道です。国分寺の前を通り、綾坂を越えて、綾川の東側堤防沿いにしばらく行った後、綾川を渡って、この鴨川辺に出てきました。

⑥ 醍醐寺跡と醍醐古墳群

西庄町域に入ります。このあたりを^{だいご}醍醐といわれます。向こうの県道33号線と綾川の間民家横に、塔の基壇と考えられる盛り上がりが見えます。醍醐寺跡で、採取された瓦から、7世紀末～8世紀前半につくられた古代寺院だと考えられます。

城山の山裾には7世紀初めころ（古墳時代後期）の醍醐古墳群があり、なかには醍醐3号墳など4基の大型横穴式石室をもつ古墳があります。7世紀ころ、綾川に近接した狭い範囲に、新宮古墳と開法寺跡・綾織塚と鴨廃寺・醍醐3号墳と醍醐寺跡と、大型石室をもつ古墳群と古代寺院がセットになって展開します。この地域が重要な地域であったのは確かで、国府設置の原動力となるような政治勢力が存在していたのでしょう。

また、醍醐の集落には現在の醍醐寺もあります。道なりにさらに西へ歩いて行くと、かつての野田産業株式会社（農機の野田）の工場跡があり、道路横の山裾には野田家の庭園跡が今も残っています。

⑦ ^{べっくうきた}別宮北古墳群

2006年（平成18年）度に発掘調査し、5世紀中頃から末にかけて（古墳時代中期）の6つの円墳が発掘されました。最大の2号墳は直径20[㍎]。周囲に溝状遺構があり、溝の中から円筒埴輪や形象埴輪（馬形や人形、家形の埴輪）・須恵器などが発掘されています（埋蔵文化財センター収蔵）。

⑧ 岩根桜

上皇が雲井御所に滞在中、しばしば来てご覧になった桜だといいます。林田の雲居御所にいた時は比較的自由で、付近に遊ばれた所などの伝承地があります。

⑨ 摩尼珠院 妙成就寺

ここに、大きな燈籠（竿がサヌカイト）と石碑があり、1800年（寛政12年）のもので、「摩尼珠院」と彫られています。碑文は「(正面)天王 / 札所 / 摩尼珠院(右面) 寛政十二申年 (左面) 九月吉辰日」。現在、第79番札所高照院天皇寺がありますが、かつては摩尼珠院という寺があり、第79番札所でした。空海が創建したと伝えられる古い寺でしたが、1871年（明治4年）に廃寺となっています。

上皇の遺体は柩に収められ、おそらくこの寺に運ばれ、都からの指示が来るまでの間、安置されたのだと思います。残暑の厳しい折、八十場の冷水に浸したとの言い伝えがありますが、清水を汲んできて柩にかけたこともあったのでしょうか。

この寺は、隣に上皇を祀った崇徳天皇社ができてからは、その別当となり、社と摩尼珠院は一体の存在でした。

また、この道は遍路道でもあり、反対の角に中務茂兵衛なかつかさも へいの道標があります。中務茂兵衛は四国の歩き遍路を279回したといいますが、この道標は1894年（明治27年）に、135度目の供養に建てたものです。北東の角には「へんろ道」と刻まれた地蔵もあります。

摩尼珠院の横の坂を「衛士坊えしぼうの坂」と呼んでいたそうです。上皇の棺を殯した時、都から上皇のお供をしてきた衛士らが警護のため、付近に仮の住居を構え、朝夕この坂を通ったという伝承があります。さらに、この衛士の子孫を侍人といい、毎年崇徳天皇社の例祭に奉仕し、神輿をかつぐのは、現在でもこの侍人の子孫に限られるといえます。

⑩ 白峰宮

上皇の遺体が安置されていたこの殯もがりの地（上皇殯殮ひんれんの聖地）に、甥にあたる時の二条天皇の命で、死後まもなく1164年（長寛2年）10月、上皇を祭神とする社が造営されました。これが白峰宮で、かつては崇徳天皇社、「天皇さん」と呼ばれ地元の人たちから親しまれていました。江戸時代の絵図には「崇徳天皇」と記されています。別名「明りの宮」というのは、八十場の霊水に遺体を浸していたとき、付近の霊木に毎夜神光が燈ったという伝承からです。白峯寺縁起によると、柩は約20日間安置し、9月16日にここを出発し、17日高屋を経て、18日白峰に着き、その日の戌の時(午後8時頃)、茶毘に付されます。上皇自身は後生を祈りながらひっそりと亡くなりました。にもかかわらず、上皇の怨霊化はどうしてなのでしょう。

讃岐の国司から崇徳上皇の死の知らせを受けた時、後白河上皇はじめ朝廷は、

喪に服しませんでした。「皇代記」などによると、上皇をあくまでも罪人として扱い、葬送も天皇であった人にもかわらず、国司の扱いとしました。つまり、この時点では、後白河上皇をはじめ朝廷は、上皇の怨霊など意識せず、何も恐れていなかったのです。

それがにわかに急変するのが、上皇の死後13年たった1177年（治承元年）です。前年に後白河上皇の女御で高倉天皇の生母の建春門院平滋子など後白河上皇の関係者が相次いで亡くなり、1177年の4月13日には延暦寺の強訴、続いて4月28日京で大火災がおき、市街のみならず大内裏まで全焼。特に朝廷の正殿で、王位継承上極めて重要な場所である大極殿が消失したことは衝撃でした。6月には鹿ヶ谷の陰謀が発覚し、後白河上皇の近臣が捕らえられます。

これらが上皇や藤原頼長の崇りとされ、怨霊としての上皇が強く認識されるようになったのです。後白河上皇もついに上皇の怨霊と認め、鎮魂のため、「玉葉」^{ぎよくよう}「愚昧記」^{ぐまいき}などによると、

- 1・白峰の墓所を天皇陵として、「山陵」と称させる。
- 2・それまで単に讃岐院とよばれていたのを、「崇徳院」の院号（諡号）を与える。
- 3・京都に崇徳院廟・粟田宮を建立して、鎮魂する。（実在の天皇が神として祀られた初めての例）

など、空前絶後の怨霊対策を行いました。

にもかかわらず、その後も源平の合戦などの戦乱が続き、ついには貴族の世から武士の世になってしまいます。そして翻って考えてみると、「愚管抄」に慈円が書いたように、その始まりはまさに保元の乱であったのです。ここから、朝廷・貴族が落ちぶれて武士の世となったのは、崇徳上皇の怨霊のためであり、崇徳上皇こそ日本最大の怨霊であるという考えが生まれました。幕末、武士の世から天皇の世に戻すためには、崇徳上皇の怨霊を鎮めることが必要とされ、1868年9月鎮魂のため上皇の霊を京都に還し、京都の白峰神宮に祀られたのもそのためです。

神社の社殿は、天正年間、長宗我部元親との戦いに巻きこまれ焼失、その際上皇関係の記録や宝物をすべて焼失したといえます。現在の社殿は、1597年（慶長2年）藩主生駒親正の寄進による再建です。

この鳥居は、1734年（享保19年）に建てられたもので、明神型鳥居を3つ組み合わせた珍しい形の鳥居です。「三つ鳥居」といい、全国的にも埼玉県の三峰神社（秩父市）や、奈良県桜井市^{おおみわ}の大神神社の鳥居（重要文化財）ぐらいしかないそうです。下が石、上が木、しかも、屋根に瓦を置いているのは全国唯一だそうです。鳥居をくぐれば、参道の両側が高照院天皇寺の境内という、神仏習合時代の様子を今も残しています。

例祭の天皇祭りは、10月第1日曜。上皇のお供で讃岐に来た人々（一説には30人とも100人とも）を侍人といい、その子孫が神輿を担ぎます。現在、侍人は10人ほどしか残っておらず、神輿の担ぎ手に困る事態になっているようです。

⑪ ^{やそば}八十場の湧水（野澤井）

この水は、どんな大干ばつでも枯れることがないといわれ、「讚留靈王」の悪魚退治の伝説が残っています。そこで、都からの指示を待つ間、遺体を靈水と知られていた八十場の清水に浸けておいたという伝承も生まれたのでしょうか。

（ガイド役は安藤でした）

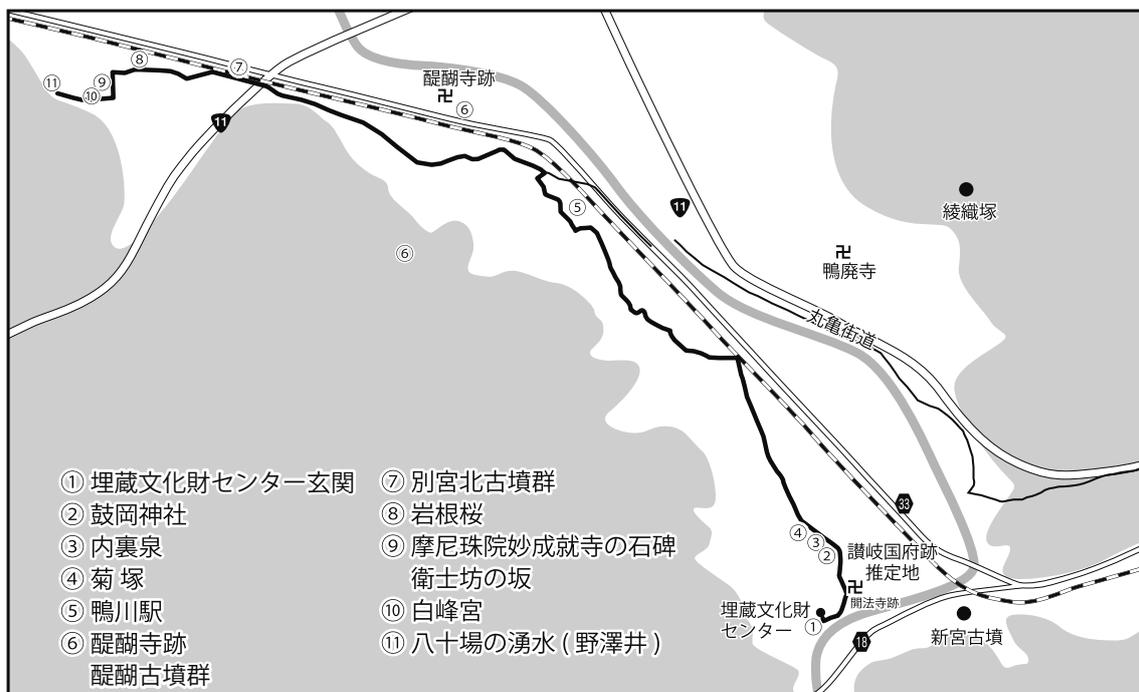
参考文献

「崇徳院怨霊の研究」山田雄司（2001年）

「崇徳上皇御遺跡案内」鎌田共済会郷土博物館（1978年）など

★様々な伝承や、怨霊伝説に彩られた崇徳上皇ではあるが、その実像に迫りたいと思ひ、当時の文献史料を利用した。そこからは、「保元物語」に見られるような怒りのあまり荒れ狂い怨霊となる姿とはかけ離れた、都から遠い讃岐で最愛の兵衛佐と共に、ひっそりと後生を祈りながら過ごした上皇の様子が見えてくる。それでは、いかにして怨霊と化す崇徳像が形成されたのか。そのようなことを調べ、参加者に伝えたかった。

上皇讃岐配流についての同時代の確かな史料は少ない。郷土史関係の本も伝承や伝説に類する史料を基に記述されていることが多く、正しい史実を確定することが大変難しくなっている。『白峯寺縁起』が書かれたのも、上皇の死から約240年も後のことである。伝説・伝承を大切にしながらも、それらを取り除いた真の歴史も残していかなければならないと思う（安藤：談）。



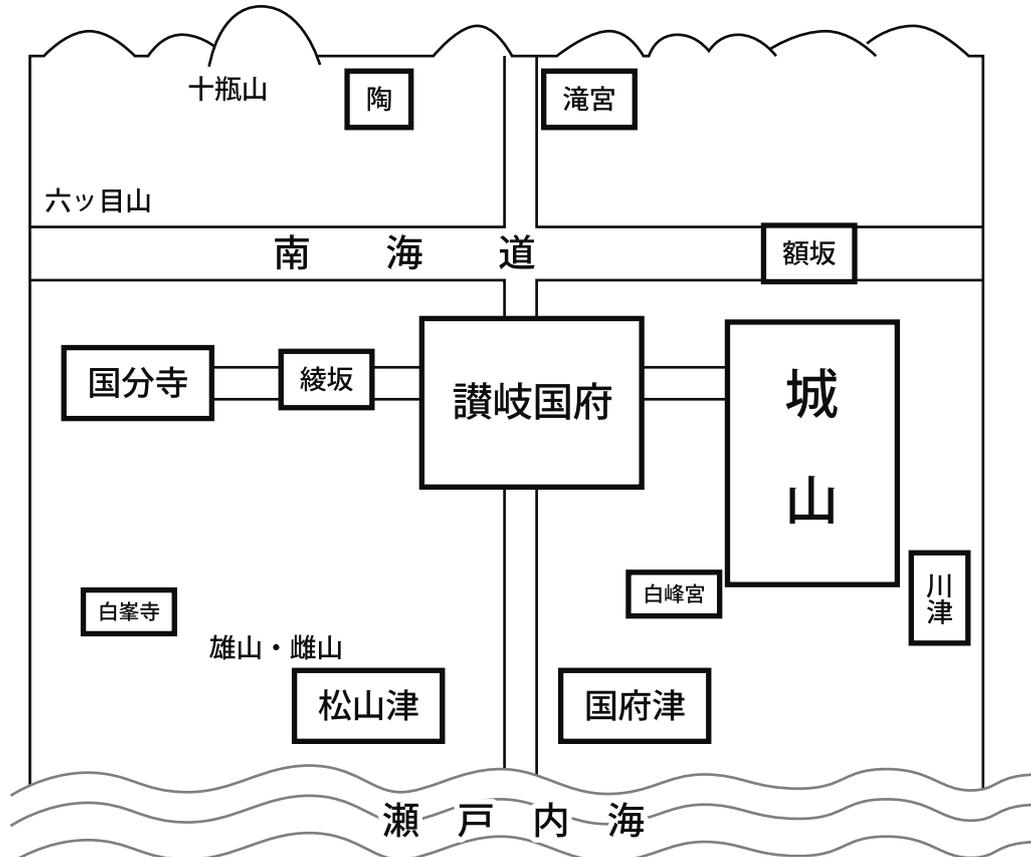
※図中の番号は文章に対応しています

編集後記

埋蔵文化財センターではボランティア調査員がまち歩きガイドを行った。埋蔵文化財センターでの活動の1つ「地域をみる視点」は、埋もれた過去のものがほとんどではあるが、私たちが現在ある姿は、過去の上に成り立っている。いわゆる DNA を引きずって「アツという間に過去になる」時間の中で、何を求めてまち歩きをやっているのか。住んでいる地域は80年も経つと皆忘れる。200年も経つとその社会さえも消え去り、500年経つと栄えた文化は誰も知らないようになる。まして奈良・平安時代は1000年以上前、古墳時代に至っては1500年もの時間を遡る。私たち個人でさえ、おじいさん、おばあさんのことまでは記憶にあっても、それ以前は記憶にない。ただ写真だけは見た気にさせてくれるありがたいものだが、すでに過ぎ去ったもの。誰も知らない過去を組み立てて何を得るのか。安心、楽しみ、平穏、表現できない生きる喜びが得られるのか。地域の歴史や魅力を情熱を持って話し、伝えることなかで、今という時間を味わっている気がする（池浦）。

まち歩き活動冊子作成委員会メンバー

安藤みどり 池浦健一 梶英憲 高橋利秋 古田博子 宮本義彦



▲ ミステリーハンターのイメージする海からみた讚岐国府エリア

**讃岐国府跡探索事業
ミステリーハンターのまち歩きガイド**

2014年3月28日発行

編集 讃岐国府跡探索事業ボランティア活動編集委員

発行 香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷 5001-4
電話 (0877) 48-2191 (代表)

印刷 ワールド印刷株式会社

讚岐国府跡探索事業 ミステリーハンターのまち歩きガイド

香川県埋蔵文化財センター